墨田川梅柳新書

一

八拾四番

〇六冊

13
1300
1

本清

得

證文

蓼客

海印寺蔵書之印

門へ 13
1300
1-6

明治三十九年一月二十九日
水谷弓彦氏寄贈

迦

天寶庚寅刻

名

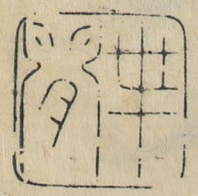
示

嘉永三丙寅年

盂夏朔為

馬琴老兄已嘱

半閒翁士



墨田川梅柳新書と刊る例

吉田少将の事。極く詳なるべし。但謳秘鈔といふものに野上の花子がうたへる歌かつらく彼少将の支と載たり。亦松雅梅雅のうち世ふはさまぐに或は梅雅ハ。

梅花無盡藏の説ハ且くおく。或ハ人皇六十五代　花山院の寛和二年丙戌三月十五日ハ没たまひし時或ハ八十四代　順徳帝の承久二年庚辰三月十五日。野人の為ハ横死たまふ。

やまとのおぼろかなるも。白楊青苔いく春秋と経たる。古墳當時とハ堪ふ。夫前ハ詳なるべし。後ハ細なるべしゆくハ。草紙物語の類の書も又なほ婦人の為ふたとのたまバ只善ハ勧悪を懲し。正を挙邪を退るのみ。違ふべからのみ。墨田河原ハ筆死すべきぞ。不毋寺の柳のいとゞ。牛嶋ハ角組む

すしめしにつけても。見ぬ世の面影と鏡が池にうつせるぞ。亦是画師のけざれしなる。渡守の烏帽子ゑたるいにしへ。郷の名も今には異なるに。平井牛嶋関屋。須田村。柳嶋などん。ふるくも呼び来れるとおぼし。葛飾は和名鈔國郡の部下總の條下に加止志加とあり。されバこそ伊勢物語に。むさしの國としもふさの國との中にいと大なる河あり。それをすみだ川といふと書られ。今は利根川と両國の封彊と定られて。葛飾は武藏に属とぞ。亦夫木集に見えたる。中ごろすみだ川に橋をかけられしもあり。彼集に康元元年（後深艸帝年号）将軍宗尊親王鹿嶋の社に詣たまひ。すみだ川のわたりと見えたり。彼わたり今はうれもしあれバとありて　光俊朝臣

すみだ川むかしハ渡りし今そ見ぬうれもしのある世となり

今の橋場といふ処。その餘波なるらんとある人いへり。亦古本更科日記に。かふさの國とむさしのさかひにあれバ。あすか川とぞいふ在五中将のいざとこハんと詠たまひし。中将の集にハすみだ川とあり。かくこそせばつさとのけられけれ。はふとまりて夜ひとよかゞくすのあとまゐるを云とあり。これをすみだ川が東にてハあすか川と稱る一證とをへし。今も彼渡の村に須田といふ処あり。これも元ハ阿須田なるが上略して須田とも呼び。又須田がもとなど訛つらんと。都人いざこそ川と云にやあらん。これハ友人蜒術齋の説に（いさゝか愚按をくハえたり）なほ考ぬべけるるもあれど。名所記などにハ漏しつ。今この草紙へ。東鑑。盛衰記。承久記にもみえざる根なれ言の葉さへまげなしつまが。あひ子が慕へる。狂女が昔物がたりと。関屋の里の雉子受地村の雲雀などもあひよせて。梅柳新書と名づけたるのみ。梅稚乃まが宗らしく作見バなり。

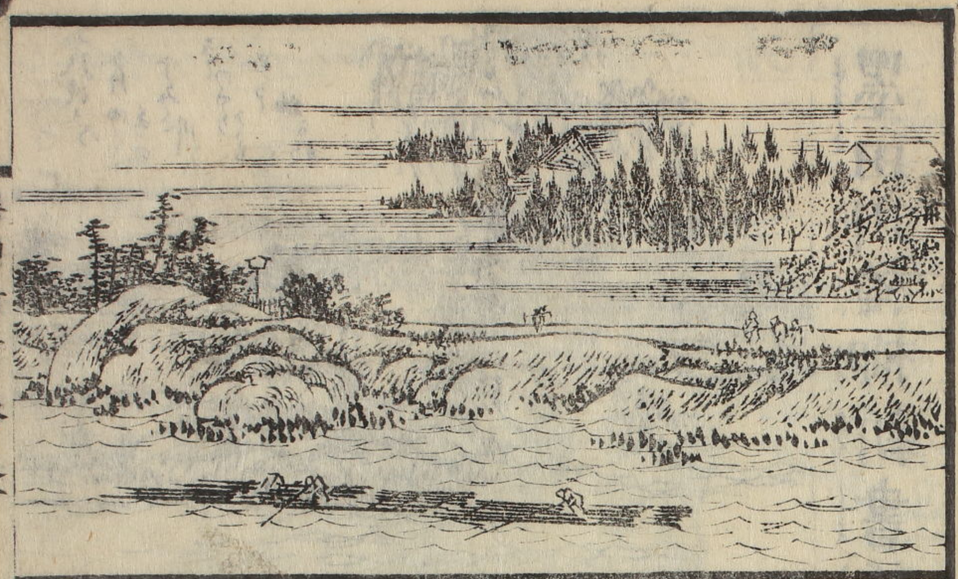
文化丙寅のとし三月十五日

著作堂識

墨田川梅柳新書總目録

全本六冊

一 訪ふ ト部惟通嵯峨野小孤を
二 吉田女將野上驛了美よ 遇ふ
三 光政避雨〳〵赤繩了繫ぐる
四 斑女花了寄せて黄金を賜ふ
五 亀鞠俳優〳〵賊僧を欺く
六 盛景影乃江了偸時を



七 殺を松稚丸潛了白川山了獵ス
八 怒宗太醉ク西洞院を鬧す
九 金鷄山を告ク惟房を陷る
十 天狗石を飛〳〵ク松稚丸救ふ
十一 春雨厚原野小山容と戦ふ
十二 光政平尾郷了妻子を

墨田川梅柳新書總目録畢

通計八編一十六條

殺伐
澤石淵の悪棍怒く少年を鞭つ
墨田川の津人憐く狂女戮
渡伐
因を説果を示す楊柳塚
奸を鋤寃を雪む大團圓

夏川ふうふさと妹乃
ちら姿といつまつも先ゝ
ゆゑしれ家

野上花子

梅雅丸

有知奈毗久
波流能夜
奈宜等
和家
夜度
能
烏
梅能波奈等遠
伊可爾、可和家武

御酒雨吾醉爾里家

赤塚軍分

松稚丸

焼刀之打放夫丈等
禱

和我世故乎安杼可毋伊波武
年射志野乃
粟津六郎
勝久

宇家
良我
波奈
乃
登吉奈
伎毋能乎
忍宗太

月ゑさとあるしは海なれ
ゆきみの松ゝうゑゝとひゝまし

椋橋亀鞠

墨田川梅柳新書巻之一

東都　曲亭主人著

（一）卜部惟通嵯峨野ふ孤を訪ふ

ひゝ後鳥羽土御門順徳院。三代の天子ふ仕まつりし。吉田少将惟房（一説ふ惟直）という人ありゝゝその先忍見足尼命ゝりゝ雷大臣の後裔卜部吉田家の廣流ゝりとゝゝ。故ありゝく家世久しく衰ゝく窶しゝりつゝふ。惟房乃父卜部の惟道といひしゝ人ゝいりゝ安元治承の間平家政を執くゝく時ゝけるこゝ弦。所縁ありて左馬頭行盛基盛の子清盛の孫ゝの家ふ扶持せらるゝよりゝふつゝく極もかなく世の中大ふ乱れ頼朝ハ豆相ふ起り。義仲ハ北越ふ出。東軍百万威勢猛く攻上りゝこゝば。平家防禦ふ策なく。安徳帝を衛ゝりゝく氏族親族ゝる遠ゝく洛ゝ落ゝ摂州ハ部郡須磨の浦ふ假の皇居とゝ定ゝまりゝゝ。且く敵乃

英氣を避さしむべし惟通も行盛に從ひて須磨の内裏をまもりたてまつる三年めまり支つて百遍千遍の合戰に源氏動もすれば勝に乘て其鋒朝日の昇るごとく平家の陣へちらしかくる有明の月に引なびく西と投て落んとて俄頃に夥の樓船を沿め光帝（安德天皇）女院（建礼門院）と乘せまゐらせ讃岐の八嶋に引退きしが又こゝをも足とゞめ得ず長門の赤間が關に着籠城をいとなむ攻られまゐらせふたゝび船に打うつり乘て高麗唐土の果までと漕出るを源氏の兵船八方よりとり巻て一騎も漏さじと攻こゝろ是平家の輩は一方を切破て行盛は惟道に私語りけるは足下は予が恩顧の家隷なれば捨りがたし今般まゐらせも立去のべざる誠心のうるはしさ彼の後のゆくへもあはれなり抑行盛が年來ひさうしつる小櫻初花とゆふ二人の女房あり生に餐和元年七月の洛

と出るとて小櫻は男子を產て初花も有身に臨月に迫ちきたりぬるの処にものがせ出てしがゆくへ軍慮に間なく絶て一しほの音耗も聞ず既に五年の春をこゝに足下の來武藝に富て仙ぎ勇一方を切脫んとの心ばへ昔の直に洛にとゞまりて彼おのがちりぢりになりてのち紀念にもとゝ備前家次が打てし短刀の劍に自他平等即身成佛と鐫入て一振と背に梅と松を鑄知しる鏡一面に餞別の品と受納て仰ぎ見るにつけてもこゝろ安さ所なしとて應ずるに去ん方もなし依て舊船に乘て行盛は有盛（重盛の子）とゆふ敵の船に乘て前左少將に捨て前の戰に二人ひしめき討死の幸に切てまゐらせ惟通は思慮ふかく人のすゝめにも一方と切脫て落ゆくゆゑに先帝

救ひ給ふべきやうなく、つと身を起し、秋の野かちの布木の葉のごとく漕
ぎ出べき様なく、此彼と歎くうち、先帝の御船に乗奉れば、口人
二位の禅尼君は時に八才、抱きまゐらせ、御剣を腰に帯、千尋の底に沈
めひねもすの典侍以下の女房達、船の艫舳に臥まろび、聲を揚げ叫悲
む人々、惟通も今さらに驚き、手足も痲痺して、
唐櫃に尻をうけんとすれども、忽地に目眩、鼻血さへ流れ出づ。亞相時忠卿
内侍所の御箱を、狼藉なりと宜へば、惟通大に駭き怕れ、潮を汰
て泉式清し、件の唐櫃を負ひ、ちらくちらし源家の侍伊勢三郎
義盛が船に到れば、吉田の庶流に部惟通と云ひけり。平家重恩の人
なれば、源氏に對し恨もあり。只假初の所縁なりとて、前左典厩行盛に
伴はれ来る。今先帝の御船に来りて、神鏡の御櫃と

守護し来りぬ。この時大将軍に成奉りて、義盛ぞ時を移さず
惟通を將て大将の船に移りしぬ。義経斜めに成りて、こびおぼれ
唐櫃を受取り、惟通を厚く待遇す。時に文治元年春三月廿日
平家の氏族悉く滅亡ぬ。神璽内侍所は故あり浦へ入給ひぬ。
宝剣は海に沈み、ひろひ出せり。惟通守護なりぬ。内侍所も
いまだ見つけ給はず。彼が續いて勧賞の事、法皇
後白河院、この旨叡慮に仰せられ、一処縣命の地を宛行ひ
官爵をも制度なくなべきなれども、惟通さに承なりぬ。今
もなほ朝恩に浴し、久しく衰へる家を興さんと、歓びざるはなし。
惟通苟も人の禍に由て、身の福を謀ふものなれども、且近曾壇浦
の討死せし平行盛に妻服の児二人あり。彼人洛を落さんと、小桜と

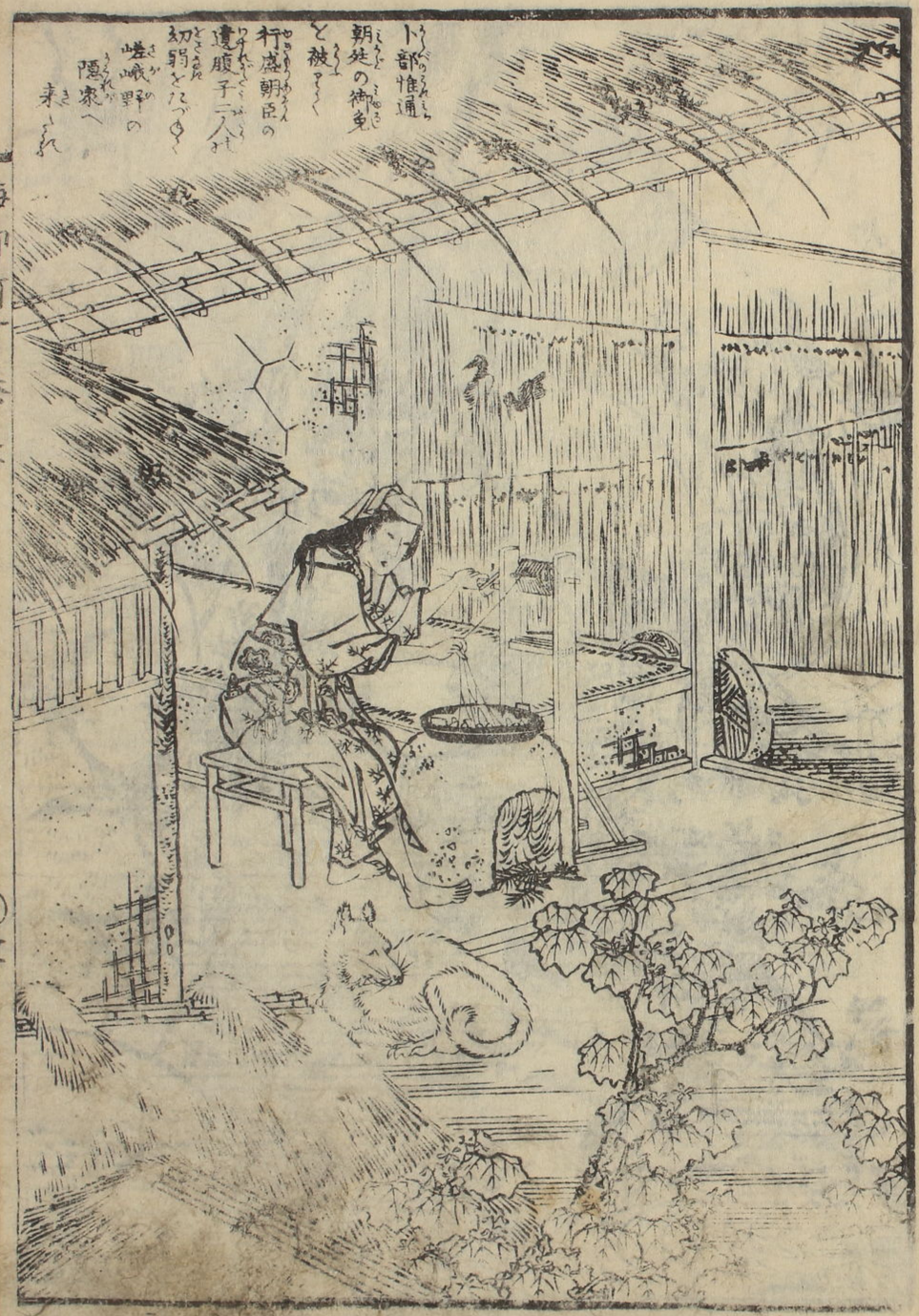
文治元年
三月廿五日
壇浦水戰
平家敗軍
先帝入水
卜部惟通
内侍所を藏
唐櫃を
守護して
源家の侍伊勢三郎
義盛が船へ到る

いへる女房かい既ふ男子出生す。初花といふる女房ハ有子くあり。そを人の
家ふ潔ヒくおけるはしを守れ。今ハその児をのく五歳なるに。めをこの
度の勸賞ふ。彼二人の稚児を賜ばその往方を索出す。惟通が子と養ひ
成長のち出家させく。父祖の後世弔ひ。これ行盛が年来乃
恩惠を報さんとそのこの許させのへと願ふまろふ法皇聞
食て御感深うして。惟通がやをとこ義あり信あるをめげて行盛が子ども
を助得さとべくとく。縁由を鎌倉へ仰つかはされしに。頼朝卿謹くこの旨
をうけたまり。行盛が平家の嫡流朝敵の首領なりその子幼少なれども助ものべ
ふめくもさいやせ。天下ふ信を失ひしの院宣を固辞をまんかうにぞうが惟通
が望ヤをふまつせられく。行盛ふ子とり紙養せ。十五ふ及ハば佛門の徒ふなも
べ。又初花とやんが腹ふうる児女子なべ彼が隨意養育ふ勿論。

り男子なべ。これ又ものとりふ出家ふ。くの如く仰含らるべ。
と回答をなるるの時當今後鳥羽帝ハ幼少ふ御ましまを。天下のの大小とな
院後白河より制度をのみなべ。法皇ヤ仰出されり。惟通ハ忽地ふ足
足ふくふく紛ひ。行盛の遺言を公ふそふ嵯峨野の奥ふ素のさくまづ小櫻
の女房を訪ふ。くのわハ鎌倉より捜出さるく疑ひく。左右なくそれぞとも
いぶしし紙。惟通赤心とわくく事當ふ告くべ。の老女ヤ涙ぐくさこ
その方ざるの人わくやおハをる。抑行盛朝臣西海ふ漂泊をるひくをるく
音耗もめくどとく。小櫻の房ハ且暮憂ふ沈く。なるを病著ふ首さへもげ
のみど。遂ふ去年の神無月黄泉の客とをりのみね。かくをりゆく世の中の人
をるも常なくて。ほれまるく世一人の老嫗ヤ。かうヤふ心をるしものが世弥ん
をるヤ。稚君を捨おくく。ゆ地をりなく逃去ふたるく分ハ里ふ久く住をぶを

恩を稟るにもあらで。卿の縁によりて。年来あづからせられば。稚君の叓
あまりに痛しく。我家に養育て。一椀の飯をもてまゐらするのみならず朝廷
より御免を稟りかく世にひろく生育あんハ。たまたま幸にして。稚ハ姫ぞ
らや喃ると呼るに。おいて應て破る籬笆のかたハらより。年紀五つばかりなる童。
引捨る菖蒲を挿頭つ走来り。世につれ時にあふがごとく。日比の類にかはらぬ
總角のいと麗しきも見えず。垢つきたる單衣も。針目ありありて。膚を裏むに
堪ざれば。いれすん行盛の遺腹子なるらんに。惟通漫に落涙し。さらぬだに涙にぬれ
志をよろこびやまえ。折あし携たる物を渉し。おのおのこの日の贈とし。又初花の女房
を訪んとて立出るを。老女ちかくしとどめ。いまだ初花のまり見えのみならずやおいは
まる。彼婦人ハ仁和寺の片邊にかくれ住く。わく小櫻と訪ひりし。訪とすなく。かくろ
懇なりしが。産のなるへ姫にて終りぬ。去ぬるに今茲弥生の下旬。平家の氏族

親族。ともに壇浦にやぶれて滅亡し。行盛朝臣も討死しつと。ひとしくきこえし程に初花
いたく叫び悲みて。終に大沢の池に投めしとぞ。その時また稚をも傳き侍つる春雨
といへる乳母。ふかくうち歎きて。初花姫の亡骸を抱き東国にあるべくあれば其所へゆきてこそ。
左も右もさぶらはめとて。族に朝夕へも立よりて。姨に稚のおもて見するのをきこえし程に。いねる
廿日あまり七日八日のころと覚し。小櫻世を去ぬめりしより。初花もいたく心おもへぬ
ぬく。いとあへなく頭殿盛行に會まつらせたく。二人の兒うちつれ逝し。ゆくべきものと定めて。お
ふしハ稚の安否をも問せ給ひけるに。行盛朝臣討死ありしと聞えて。愁傷のやる
かたなさに。初花人を遺しおき。大澤の池の水屑となりのこるばかり。こゝろの中推量
られていとあはれなり。されば彼処に尋ゆかんのみならで。絶てそのうひあるべからずと
物がたるに。惟通ますます遺憾に堪ず。我ハ彼春雨がゆかる国と同じく東国とのこと
きこえて審にハしらざりしといふ。かくてあるべきにもあらねば。稚人の手を引てかへりち


卜部惟通
朝廷の御免
と被
行盛朝臣の
遺腹子二人
幼弱をたづく
嵯峨野の
隱家へ
来れ

初花の女房は
彩盛詩丸
のゆを宮て
悲歎小追り
ころふ
五丈ろく姫と
遺ーもき
大沢の池へ
投ふ
乳母子
春雨
愁傷セ

出さうとすれども仁和寺のやうふ勅して。里人ふ縁由を告く初花のうへ尋るふ。彼老女がいつるふつゆ遠ざれべ。ちくるく立うう。人ふ就て事審ふ奏きこえきれば。法皇いと憐くおぼしく。行盛が女児の往方定うあるべいうふせん。これとゞ緩やふ索ねべし。今携来れる。稚きものを養育んあ。一畝の田一策の稲をもてこゞへ便るくわくく。近江国志賀郡ふく荘園一箇処を賜アくれべ。惟通ふく朝恩と謝しきり。やゞく彼処ふ家作らう。伴の孤とゞ行稚と名づけて愛やるひね。惟通元来一子ゆり。柳王とよびく今茲七歳すり。妻ハ産後ふ不幸まりしがへぬる養和元年。行盛ふ従ひく。惟通洛を落るの日。稚ハへ足まつうるうくく。叡山月林寺の仲圓阿闍梨とハ。その才従第ゆるくく。ものころ僅三歳ゆるうるゆ子柳王と彼寺ふ預おきしふとも家ふ迎うう。成長の後吉田少将惟房とゆるうこれゞさて惟通ハ幼少うこの二人ふ義を結ばせく兄弟と。行稚ハ年も劣うれハすんと定わ。ゆうふ物学とく。慈愛ふ親疎めゞゞれべうれと使へすくゆ惟通と構讃し。寔ふ当世の義士ゝゝそひむくうる。

二 吉田少将野上宿ふ美ふ遇ふ

光陰ハ流ゆる水よりも委しく。行稚や長立ふれど人のゝろざまゞうり。親ふも似ざるものゝうる。その才左馬頭行盛の庶子入道相国清盛の曾孫ゝてよゝうり。ふハつのわゞも心とゝめど。行ハ放りく。ゝうつ廉勿ふえしゝ惟通とりく折檻の教訓とゝうふるとゝへゞ。絶くこれと用ゝる。又惟通の一子柳王ハ学問武芸ふ志篤く。且身の慎ふくして。その父ふも勝れる如し。時ハ建久四年癸丑二月十五日。惟通ハ行稚うゆふ袈裟念珠度牒ゝゝべくの僧具と勢ゝうのへス行盛の紀念ゆうゝる。備前家次が。自他平等邸身成佛の短刀と授く戒刀とせゝ紀。ゝゝゝゝ叡山月林寺ふ登しく。仲圓阿闍梨の徒第ゝゝ今茲行稚

十四歳。その期ふ違うんるとおそれ。このゆ豫く官ふゆえをもりく。ゆくハ法くくこと
うん。又まぐ子柳王十六ゆ別ふ日とトく元服さを。吉田惟房くと名生ゆせくう。
きうふこのころ後鳥羽帝。ゆ管武藝と好くゆくをりく。鎌倉ふ仰せておほえ
わる武士十人と北面西面ふ召ゆるぶ。惟房も弓馬劒法を嗜くその業既ふ熟
せくと聞召され。又惟通ハ仕官れぐくるぶ。その子ハいそ青雲の志ゆう
らん。彼ものを進せくく。叮嚀ふ仰下されく。行ふ。惟通かると推辭をんハ
いくもかくに。ぐくび系ゆくく洛ふよくくれ。鷹く惟房と職人ふかくされ。家ハ
北白川のかくりふく賜りね。元来怜悧かゆ君の由おぼえもつと愛くゆぶ
家と負へくんものへゆくどこの子ゆるべくく。父へふくく娘くくふ盛ゆび虧ゆ
かくくひふく。その身老の坂を登りも果ど。建久七年の秋のころ。惟通假初の
病著ふ刈ゆるくり。鍼灸藥餌も驗ゆくて。終ふ身まりゆり。惟房くく悲く

送葬取のごく執行ひ。忌ゆもとりて後奉公舊のごくくゆ忠勤拔群かれ
ゆくく官位年ふ昇進くへまぐ五六の齢ども超ぐるふ。四位左少將ふなられ
ゆる。幸福ハ世ふと稀ゆ。今ハゆるゆくる嫡家ふも勝ゆくく。世の人のゆくひよりセ厚
く。義くゆくもゆりくとどゆくく。建仁二年壬戌の春。少將惟房陸奥の國司
ふ任ぜくゆ。彼國へ赴ものふ。家隷ふハ粟津六郎勝久。松井源五純則。以下の
老黨若黨。前驅徒従くく猿くらねゆられ。舊臣の子孫ふく。彼此くらまり
集會くるものどもゆ。これゆ先建久九年三月三日。後鳥羽院隱居させのふく位
を一の皇子為仁王ふ讓ものふ。土御門院これゆ。ものゆ天下の政ハ後白河建久三年三月十三日薨
の舊を追ふく。院後鳥羽より制度せさものふ行ふ。今度惟房を陸奥の國司ふ
任ぜくゆ。つるも。院のかくくひと学えくゆ。かくて惟房ハ洛とくくく日と
りのふ。美濃國野上ゆる。長ゆ家ふ宿くるゆ。その長ゆ女児ふ花子とゆくる白柏子へ。

その名高く洛ふも ゆえく。漢ふ〜くへ趙飛燕。和ふ〜くいこのころの洛の静
池田の侍従ふへ勝ることも。更ふ劣るべくもあらぬぞ。青春既ふ廿二歳いまぞ夫とも
定めどその姿こそ艶麗まれ。心へとえく 流るるるく。かる 佶業とまと女子
ふへ。類めるぞ ちく人こる賞しるる。ちるふ 長へ惟房のこふ 散りのへるぬつと
面目めるるふおばえく。さまく 饗應まわるせつ。女児花子ぞ 舞の曲へ巫山の
雲とも招くべく。雑錯せるもの〜調ふ。軒の春雨音をへぬ正ふも野の花却て艶
く。濁江の月風情めり。天離る鄙ふも又かる美女へめりるとく。惟房 ふへ顧
耳と側く。目を斜ふ〜おへせしうべ。花子も又都人の風流るふらるるめ
けれなるべし。さく 席と換く 夜の設とるふ。長へ〜ぶ子ふ 對く。羽生の小屋
のつぶせる旅寝へ殿もさとる寂莫おわるべき。枕方ふまるうて慰め進〜せ
てるつるも心めり 良く。花子へまは 聊ひく立わるを。女の童ふ案内させ。

るるく 卧房ふ 蕩しうへ。少将も風ふ靡く青柳のいとふくるるるおぼしう
一夜の夢と 締のひねさる行ふ惟房へ。詰朝野上とるるく 路とうとう。日ふ
歩を夜ふ宿り。奥州宮城郡の府ふ著く。邉庭を治のふこと二年ふ及び。元久
二年の春任限既ふ充ふるるく。洛へるるり上るるく。路の叙るるれば此度も又
野上ふ歇るく。長が家ふめるるさとのへば。長へ女児とるるふ出迎へ。管待し
めふ弥増るれど。花子へ行るるん顔色鞏るるげるると。惟房 ふとるのるるふく
異るる。情由と問んとるるふ折るる。長がかれ抱へる嬰児の。年へ三ばるるる
が。ゆるく 膝ふ伏るるれく。惟房のるるるるる まるるるべ。こへ行りの子るるぞ
と宣へると。長含咲く。これるん花子が産行るつる。殿のゆ子ふくおるるる。
るるも郎君ふく るるるせるるべ。この三年が行へるるふく風ふも當じて。塵さへ
るるるど養育行るるるふ。惟房 ふく眉根とるせ。これ性ふるふ伯しるる。

吉田少将奥州の
國司となり三年ぶり
ぶりにて西京の
うちへくだり
野上なる
長が家に
歌をよむ

花子と一夜の契りなしにハあらねど。ゆくと送り来る迎へ。艶曲をもて人を慰る
ど。其の務とをするものゝ産る子なれバ。乱りとハいへるもおぼつかなし。又かゝる
あらバ。縦千里を隔られバとて。雁の翅に書を寄せてもらくに叶ひへからしと。この
子ハ跂まちひ今ハ歩もよろ行するに。されバこそ告来さりけれ。いつしもそろ
得ねと賽へバ長かさるし。そのうち字えまかゝせざりしハ。花子が身の賎き羞
くし。常言に樹を接バ花もまた竊むべし。人の乱ハ盗ぐらしとぞいふなるその
稚子の面影の殿に肖るや否。かゞみ照して見すべしといふ。その時
まゝも花子ハ一言をまじらへど只物おもはしき気色なりしが。つひに立て一面の
鏡を携来る。少将のかたはらにさし出しければ。惟房とりて打かへし左見右見
てうち驚き奇なるかなこの鏡ハおのが秘蔵するものと露違ハねど。彼処の櫛笥ありて
と仰もあれバ長ころを得て旅櫛笥ありて来るとうち聞えてとりいだしけるに

鏡も摸様花子が鏡に似たり。背にハ松と梅とを鋳なし。作者の名字長
短すでそれかこれかと見まがふむかりけれバ。花子母子ハさらなり。惟房いよいよあやしと
おぼしくあたりの鏡ハ。往時文治元年三月廿五日。壇浦にて討死せし前左馬
頭平行盛の所蔵なるを故ありて亡父惟通より相伝せしが。これと彼とハ元一
対なりいつしか其の一面を花子が手にハ入りけるかしらん。かゝれバ縁故こそあら
め。実まかしと宣ふに花子ハ涙さしぐみ。やゝしばしく應もせねど。長も傍らより
申して日くしていつかるへこの鏡ハ異なるわざなり侍る。今ハ何か隠侍らん。
この花子ハ長が女児にあらず。左典厩行盛朝臣の遺腹子にて。初花といへる
女房の産なりけれバ。さてこそ花子と名づけ侍る。今ハ廿余年のむかし行盛
洛を落のひしとき初花とバ倶せられしが。嵯峨野にかくれ潜せられつるおりしも
懐胎しておいせしかバ。程なくその月に臨ミて。この姫を産ミ。長

行盛思顧の老黨山田太郎政綱といひしものゝ女児あり。春雨と呼れけり。母は世を早うして父のもとへ。それも主に従ひ戰場に赴きて。彼の初花ふ傳まうしたり。嵯峨の隱家に住しかば。あるとき。味氣なき世のすまひ。こそ悲しけれ。正しく入道相國の曾孫。卿産の鑄蟇目鳴弦なんど。彼式この壽ましく。栄付ぬれば。盛衰は一炊の粟とまことに。飜轉まことにありあり。藁屋に雨露を凌ぐ。姫の産声揚るふ人ふゆゑとゝ。ゝへば心ゝくゝくまゝ四年の春。五年の春ふ。平家の一族は落屋の鳴の内裏とも攻火せしを。行盛朝臣いさゝか。父政綱も討ぬ。後ふ変ずる悲しさに。比んやもめざりけ。又おなじ思ひふ沈むへるもあり。彼朝臣の愛のひとゝ。小桜とやせし女房ふは。男子出来のひとゝ。ゝふ嵯峨ふ住のへば。迷ふ憂を訪ひ訪ひのひとゝふ。その前つ年ふ小桜いまだ人の数ふ入らく。行ふ稚子のもとりのへ。初花は只身ひとつふうこれく。後ゝ哀傷やれかさるりけん。あれ暁ふまのび。ゝ。大澤の池ふ投りひぬその時ゝ身の胸くゝさに。今絶るふもあは勝まり。元来平家の黨とゆゝ。ゝへ木と伐草と苏くゝひても。捜出されて命こゝろと。人ゝゝいひ罵るふひのゝ。流はし初花の亡骸を索ゝ。送葬をゝもゝへど。俄頃ふ姫とうゝ抱く隱家を走り出ふ小桜の産のひとゝ。稚子のゝとゝ。流ふ。ゝしの老女と相語あゝ。この美法國ふ聊所縁あゝへ辛おく。逃ゝれとも主従ゝ露の命繋べき便ふ。この家の主人光二郎といふりのゝ妻とゝ。姫とゝ。姉の子ゝりと偽りて養育まゝ。成長のふ隨ふ。姿いと嬋娟ゝて。心ざまゝ又風流のゝ。夫光二郎もあうく慈ゝ。糸竹の調立舞ゝとも。その師ふ就く習せ。ゝ。夫光二郎ふ四年前ゝり中風とゝ。病ふく。起居も自在なゝと。家も

まもく貪〻かりふれば。已〻を沒どゝ。やく白拍子とまうさせけり。
原その志あ〻ざれど。姫ふこそ父母の素生とも。ゆえ進〻もしれ。夫ふまは明白
ふ告ざれば。彼又止むべからもめ〻ど。姫も又光二郎が年来の庇とおほせば。更ふ
固辞氣色りあくて。かる活業をのふわぞ。今ハ野上の花ふと〻。人もまろこる
花姫とまりのひねる幸あさ〻。さんのまこ平人の妻こふるさど。活業なるが
いふどん人のろふ酒宴の奥ハ濃とも。淫るころりく。身をる放〻のひ
そと。諫りさもおば〻〻共歳ろまぐ。ふは處女ふくおいせ〻とろこる
年殿。ぶ家ふ宿〻せのへば。かる貴人ふ縁ふ〻締のひうば殿跡のふこまろ
まるりかんうとさてそもれ〻〻ひりまく萬〻。その夜の契空〻うば。
この稚君を産せけりつゆど。面あろう縁故とやさどハ殿よも實事こふ
うふ〻。ふ〻や實ろ〻ふまも。平家の黨まりとゆえこまば。側へる居

のろ〻。こやせほうかくやせほどとおりふ屋〻。ふろ〻せうふ日を只すう
とわりどふ。待よ稚といつをふ。稚君の名をもろとまく。待稚と稱なし
と首尾と告ヤビば。花子もヤ頭と攫ひへるおいいぐ已まんまま〻ふど。又
の名さへ〻し。ひりつふ。まろへいぐ聊〻れ。平家ふ因ゆるのをふ。墓ひ
まか〻まるちも。洛へい俱〻のろ〻。されどこの児ハ君の胤ふそけろうれば養ん
とも棄んとも。ひろろふ仇せのへう〻。もへふ今〻ら尼とまろて。処定めど黒法
の袖ハ結べど結び果ね。縁ふ〻とひさえまんとて。ろ口說つ〻ろと泣ば。惟房
つ〻ぐとせ〻く。或ハ驚た或いまろこび。とろども膝とまめ赤縄ひとび足ふ繋
ば。終ふ帰夫とまとこいふこ〻ふるふのまるし。抑〻ふ衰く。亡父惟通
久〻く流浪〻ひつまろ。且く行盛の家ふ身と侍まふふ。いく行りあく
源平鑣と削ふ及び。父も行盛ふ俱ど〻く。海ふ赴き彼人討死せ日

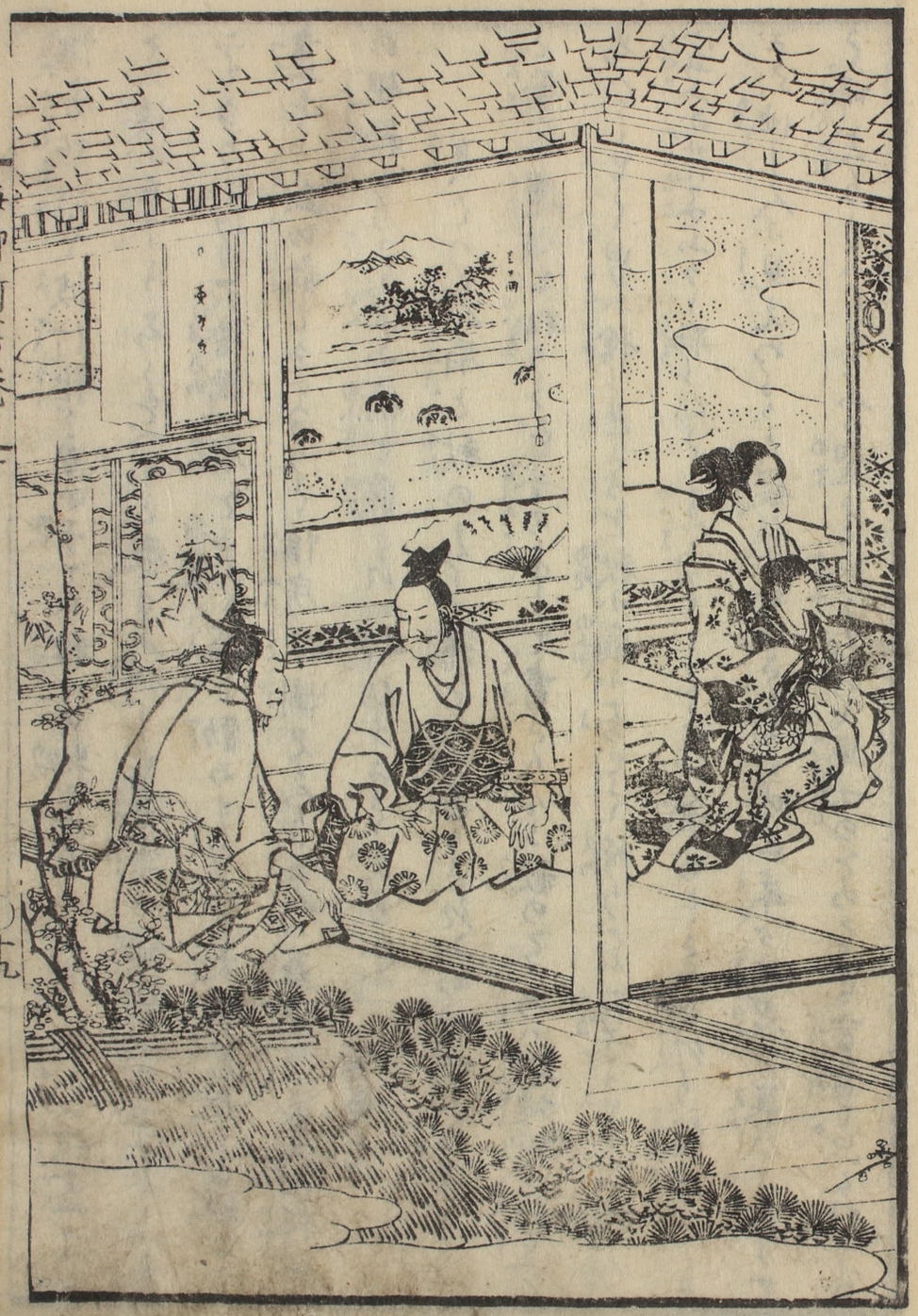
ますに宿を去りて在せしが、行盛その誠心を感激し、後の形見にとて、家次の短刀と此の鏡とを贈り与へ、小櫻初花の産る子のありとならし。さて亡父これを承り、一方を切脱んとせるに、敵の兵船遮り留て、輙くも脱まじかりければ、行し不圖内侍所を抱き、これを携て義経の船に投入。その功として行盛の子どもの命をもし。忽地朝廷の御免を稟られしてかねてまはろより常にひとつ出のふところに入れ、又さくそのまゝとまりて。それからめぐりてそ惟通こゝろに嵯峨野に身を沈め、小櫻の産みし行雅を、我が手にて育り、叡山円林寺へ登して出家させける。又初花の産りし女子の往方を索るにたえて知れざりしが、惟通ハ建久七年の秋世を去り。其子に後鳥羽院の寵遇を得てよく昇進しけるが。審に説せしは、宣ふは亡父命終らんとせし時これに惟房ぞ見えりて、まだ死にはせんに分られし行盛の女兒のありし。環會ハ養ひて汝に

妻ありとぺりしが、未だ其の身成らずして死なりしこそ恨みなれ。汝父が志を継ぎて普くその行方をたづねよ。されど貧しくしては叶ふまじ。義に干て違ふことなかれ。只この一條のみぞ黄泉の障りともならんと宣ひける。遺言なりければ、今は妻を娶らず陸奥にありける程も、彼につれこれに語らひて、ひたすら索ねつるに、おもひきやその人は花子なりし。されば契を締んとして、侍稚いまだ兒と、花子は今よりわが妻ぞ。さるにても此の鏡は、樂昌公主が故事にも似たり。これ行盛の賜にて初花より受傳へんと宣へば、花子も春雨に海月の骨にあへるここちして、袖の涙はまだ乾かねど忽地面に咲をふくみ、この鏡は行盛の洛を落ちしとき、とりし名残の品を頭殿の形見として、初花の愛蔵ありしを、長が花子に進しまゐらせしに、待ち寝に宣ふところとやすまりれば、假初の縁にもあらず。昨夜燈に花を結び、今朝又喜鵲と申すもの軒端に鳴つるも、この吉祥なるべきにこそ。且侍稚君も歓びおぼせられ、父上にましまさぬこそ

花子なりとも扶引て。名字をわかつにいたれば惟房これを膝にのせ載せ。今まで
ながらになかも。松と梅と。名を鋳出したる二面の鏡の引きでもの。花子にはこれを待らしめ名づけ
けるに実植の松を得られば。侍を松に更て。松稚とこそよべられ。既にこの松ある上に
梅もなくてぞ生ひ出べき。絆びられにまとはるゝ。まづ縁由を老堂にもしらせてや
らで。粟津松井以下の家隷を召集會。松稚花子春雨がゆくすゑの落めなく諸
のべ。衆皆大に欽びて或ハ雪の松に操節を稱し。或ハ十八公の栄とぞ祝しけるその
時惟房春雨に對て。汝が年来の苦心忠ある義あり。実に女の丈夫なりけり。初め
花に傳て。又よく花子を養育られば。春雨の老女と呼んもるに稱へり。今花子
をも浴へ揚て上るべきに。夫光二郎とせんハいまだちつると同のべ。春雨うけ
たまはりて。数かもめうぬこの身として叮嚀にゆえなる恩恵のうれしさよ。夫光二郎
ハ去年の夏身まかりけりて。ちかるべき親族もなく一子太郎三郎といふもの。今茲

十七歳になりぬ。彼幼少より武藝を好みて。賎の手業にはとまらず常には
家にしものかうね共。今は殿のへいせのみとめて。よびよせて仕りぬ。かゝりしに
内月とのわかせめへはしとやをふで。惟房それ召せと仰せるに。太郎三郎聴く
て母の後方に参りつ。その形容鄙にハ似げなる壮佼なり。物の用にも立べく
みゆれバ。惟房なほちらく召よせて。汝彼処にて縁故ハしく好つるん。母が誠忠
を稟つぐらく。われが家に仕ふべ。松稚が股肱ともなるべし。汝が祖父ハ平家の
侍なりく。山田太郎政綱といわれしが。父光二郎が家と象て。山田三郎光政
と名告よとて。まづ見参の引出物に。太刀烏帽子なとの紙賜ふとて。春雨ハ
いふもさらなり。花子もろともに欽びゆゑに。こよなき恩恵のうれしさのかくはまづにぞ
及しのふにつれて。叡山月林寺に登しのひつる行稚とゆへんハ母こそ異なれども
兄上なりく在とすれバ。共になしつけりおぼえぬ。今は其恩なくやかハゆると問ふ

少将惟房二面の鏡に
よろゝ花子ハ行盛の
女児なるこをまろり
松雄りろとも浴へ
将さくよりなふ
春雨ゞ一子山田
三郎見参しく
家の臣となれ



惟房點頭く。彼行雅が身に千ての種々の物がたりあれど。一朝には説盡がたし。
その後に委しく語らんと應ずる折しも。遠寺の鐘聲音づれて更は初更
なりければ。春雨は席を更て。盃を勧めまゐらせ夫婦君臣さへ歓びと
盡きぬ盃の数もかさなりて。惟房不圖すゝりの蓋、襖のこなたに料紙
の硯箱ありしに。上に扇を載られば押ひらきて見れば。
夏もつれし扇と秋のちぎる露とのがれがたきにあはれなりしの床
と筆の運びも拙けれど。女の手して書きけるを。歌のこゝろは斑婕妤が故事を
おもひよせて男に捨られしを。秋に扇によせて詠けるに。花子が筆にやあらんと
宣ふに花子ふかく恥らひて。宣ふごとく我が筆のすさびに作り。縁由をかさ
ねて他人に見えんことを疑ひもおぼさんが。その三年が程君と慕ひまゐらせ
て帰りのぼり給ふ日とては翌をもまちびて。馬士のたよりにも言告て只これのみ

聞せ侍りつるに。此度は美濃路を過りのよしを聞えしかば。さては洛へ去るぐと
暮へぬるべきさとすりも後れ居して死んよりもかりかありなんとて浅ましき
ある女子のわざなく。辞世の歌を遺しあげる。幼き人の袖に携りて。愁に絆とあれ
ばある磐蝉の裳さへ脱得ず。一日二日と泣くらせしに。とはり聞つるは空言にて。
忽地走卒の告来りし。又こゝに宿りせられしと。罵るに。いと浅ましくも
嬉しくて。かの扇さへとりいでて見せまゐらせ。こそ面あかれしく事の本末を物
がたれば。宣は駿然とうち驚かれし。殿の帰洛十日ほども後れんには。再會はありがたきん
さる由ありし。此のみことのひめつりきに。惟房は宣ふ士は己を知る者の為に
死し。女は己をよろこぶものゝ為に容づくると。一夜の情に百年の命をかえんと
おもへるか。さるも尋常の女かは。やよしこの志移らずんば。偕老の誓を行ふべ
し。あゝ花子はもろこしの斑婕妤がくらべば幸あるものぞ。ちなめばこれとも 斑女と

孫ども憂とこれね夫婦が孫ふ。警うもあと〳〵こく。氣色ごろ〳〵乃えのふ
おそこの時ごり花子と稱しく。人〻ゑ斑女前とやゝる。ゑ祖ふ少將惟房ゑ。
粟津六郎ふ。奴隷十餘人を強しそめ。春雨山田二郎おとのふ。斑女松稚乃
供〳〵こ。洛ごりとべしと仰ぜく。次の日野上をとらく。孫ごゑふ路ふいそ
ぐし。日ゑ〳〵ぞ洛ふ帰著く。言の次ふ斑女松稚のゑもゆえめげのゑふ。あこ百
後ふこく彼人〻も恙ゑく上洛せり。因く黄道吉日をえゝこ。斑女と新ふ婚姻
の蓆を開ゑく。いよく睦〳〵ゑえの人〳〵祖ふその年の終ふ亦男子生〳〵
のゑひぬこんべこを鏡の梅をを得これこく。これとば梅稚丸と名づけ鍾愛のゞ
ま湯〳〵ざりゑとゑん。

墨田川梅柳新書巻之一畢

本所相生町二丁目
紙屋利助板